

日本文学史研究

席卫国
张桦 著



陕西师范大学出版总社有限公司
Shaanxi Normal University General Publishing House Co.

日本文学史研究

张 席
桦 卫
著 国



陕西师范大学出版总社有限公司
Shaanxi Normal University General Publishing House Co., Ltd.

图书代号 ZZ14N1249

图书在版编目 (CIP) 数据

日本文学史研究 / 席卫国著. — 西安: 陕西师范大学
出版总社有限公司, 2014. 8

ISBN 978-7-5613-7834-2

I. ①日… II. ①席… III. ①日本文学—文学史—研究
IV. ①I313.09

中国版本图书馆CIP数据核字 (2014) 第192784号

日本文学史研究

席卫国 著

责任编辑 曾学民

责任校对 涂亚红 山口隆正

封面设计 风华文化

出版发行 陕西师范大学出版总社有限公司

社 址 西安市长安南路199号 (邮编710062)

网 址 <http://www.snupg.com>

经 销 新华书店

印 制 兴平市博闻印务有限公司

开 本 880mm×1230mm 1/16

印 张 9.75

字 数 200千

版 次 2014年8月第1版

印 次 2014年8月第1次印刷

书 号 ISBN 978-7-5613-7834-2

定 价 27.00元

读者购书、书店添货或发现印装质量问题, 请与本社联系、调换。

电话: (029) 85307826 传真: (029) 85303622

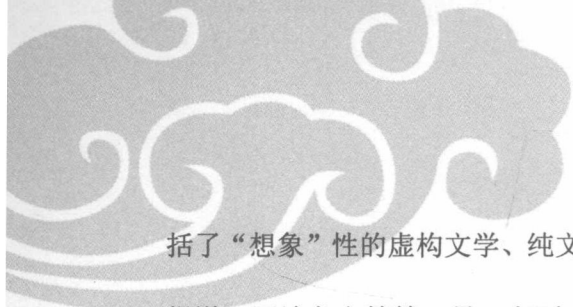


前言

我国的文学史研究，包括中国文学史与外国文学史研究，经过二十世纪近百年的积累，已经有了相当扎实的基础，取得了不少成果，各种中国文学史、由中国人撰写的各种综合性的外国文学史、世界文学史及国别文学史著作与教材已达上百种。但毋庸讳言，除了少量以外，这些成果角度较为单一，作家作品的传记式研究、教科书式的陈陈相因的文学史，占了大多数。同样地，日本的日本文学史研究也存在类似的问题，日本已出版的各种各样的《日本文学史》类著作数以千计，比中国出版的中国文学史研究著作还要多。但是除了少量著作外，在层面角度、结构体系、观点资料上多是大同小异，带有明显的滞定性与模式化特征。

文学史研究要进一步推进与深化，就必须从通史、断代史、作家评传等单一化、模式化的研究中寻求突破，尝试从不同的角度、不同的层面，发掘和呈现文学史上被忽略、被遮蔽的某些侧面，以各种专题文学史的形式，呈现文学史原有的生动性与复杂性。要做到这一点，就有必要引入和运用比较文学的观念与方法。就中国学者来说，要在外国文学史、世界文学史研究上有进一步的深化和发展，必须强化中国人独特的学术个性，发挥中国学者独特的优势、利用我们得天独厚的、外国人不可取代的条件进行富有独创性的研究。其中，研究涉及中国的外国文学，即研究中国题材的外国文学，就是一个很好的突破口。

本研究，就是上述理论主张的一个具体实践。它属于日本文学研究，更属于比较文学的研究。在这里，“文学题材”这一概念不同于比较文学法国学派所提出的“形象学”中的所谓“形象”；所谓“日本文学中的中国题材”，也不同于“日本文学史上的中国形象”。“题材”当然可以涵盖“形象学”的研究对象——异国形象及异国想象，但同时它又不局限于异国形象及异国想象。它包括了异国人物形象，也包括了异国背景、异国舞台、异国主题等；它包



括了“想象”性的虚构文学、纯文学，也包括了有文学价值的非纯文学——写实性、纪实性的游记、报道、评论杂文等等。另一方面，文学的题材史研究既是文学研究的一种途径与方法，又不是一种纯文学的研究。因为题材不是纯形式问题，它承载着丰富的社会文化内容，对题材的研究本质上是一种文化研究、特别是文学社会学的研究。而对中国题材日本文学史的研究，实际上是中日双边文化交流关系史的研究，是中国文化在日本的传播与接受的研究，是比较文学与比较文化的研究。

鉴于中国文学题材在日本文学发展史上的地位和重要性，有必要从比较文学的角度，为中国文学题材的日本文学史写出一部独立的、有一定规模的专门著作，这是一件拓荒性的工作。该研究成果有助于读者进一步了解日本文学与中国的关系，有助于从一个独到的侧面深化中日文化交流史的研究，有助于进一步揭示中国文学、中国文化对日本文学的巨大的、持续不断的影响，有助于中国读者了解日本人如何塑造、如何描述他们眼中的“中国形象”，并看出不同时代日本作家的不断变化的“中国观”，并由此获得应有的启发。



目 次

はじめに	1
------------	---

第一部 上代の文学	3
-----------------	---

第一節 序論	3
--------------	---

第二節 神話・伝説文学	4
-------------------	---

第二部 中古の文学	18
-----------------	----

第一節 序論	18
--------------	----

第二節 漢詩文と和歌・歌謡	19
---------------------	----

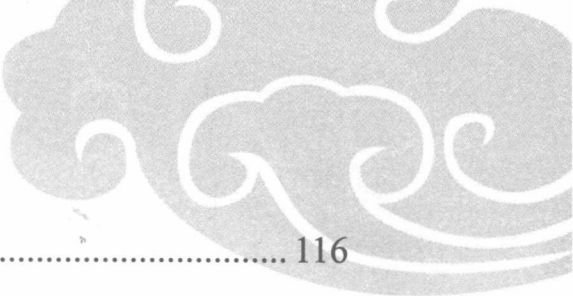
第三節 物語・日記・随筆・説話	27
-----------------------	----

第三部 中世の文学	41
-----------------	----

第一節 序説	41
--------------	----

第二節 和歌・連歌・漢詩文	44
---------------------	----

第三節 説話・軍記・随筆	50
第四節 能・狂言と歌謡	58
第四部 近世の文学	63
第一節 序論.....	63
第二節 漢文詩・和歌・俳諧など	65
第三節 近世小説	70
第四節 歌舞伎・浄瑠璃・歌謡	76
第五部 近代の文学	83
第一節 序論.....	83
第二節 近代前期の文学概観	84
第三節 近代前期の小説と評論	85
第六部 近代後期の文学概観	115
第一節 序論.....	115



第二節	プロレタリア文学と芸術派	116
第三節	文化統制下の文学	120
第四節	戦後の文学	123
第五節	現代の文学	126
第六節	俳句——大正から昭和へ	133
第七部	終わりに	136
参考文献		146
山口隆正教授の書評		147

はじめに

文学史とは、文学のあゆみを客観的に跡づけ、そこに文学特有の展開の摂理や、有機的に互いの関係を明らかにし、更にその展開をつぶさに眺めることにより、今日、明日の文学への批判や展望の一つの基準ともしようとするものである。従って、どんな作品が生まれ、それを書いた作者が誰であったかといった一つ一つの事実を書きとめていくだけでなく、それがどんなかかわりを持ち、どう展開したかという文学の流れを見ていこうというものである。

日本文学史の時代区分

日本文学の流れを見ていく場合に、いくつかの時代に分けて、それぞれの時代の特色をつかみ、数多くの作品が作られていく中から、質的に転換していく状況を知ることが重要な方法である。その分け方と、名称については、さまざまに試みられているが、本論では、上代・中古・中世・近世・近代前期・近代後期の六つの時代とした。

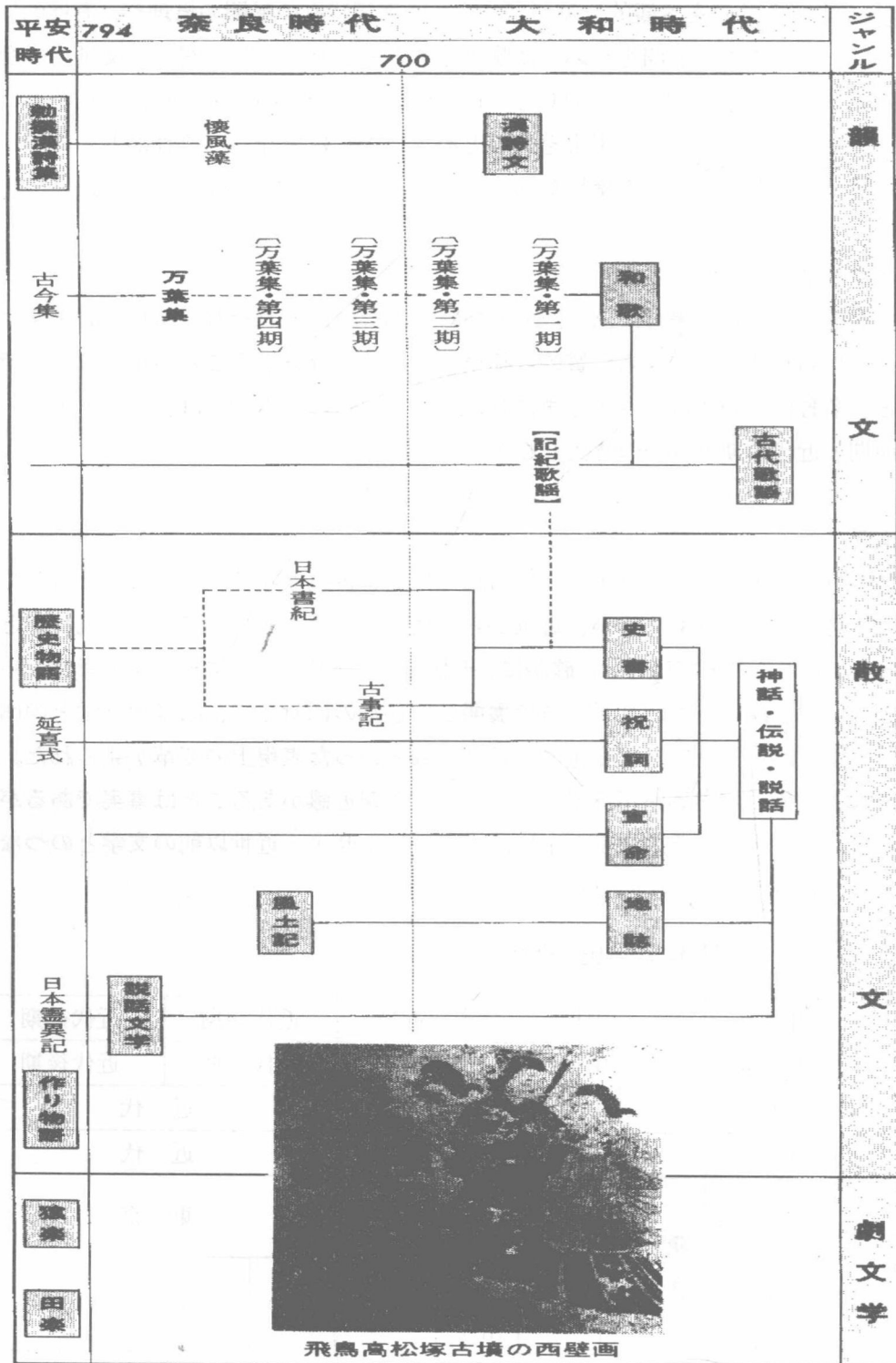
古典と近代文学

六つの時代のうち、上代から近世までに作られた作品を古典と呼び、近代文学と著しく異なったもののように考えられたりもするが、近世から近代への展開にあたって、その流れがとぎれたり、断絶があったりすることではない。確かに、それまでの文学が、外国の文学の影響からみて、主として中国の文学と深いかかわりをもって展開してきたのに対して、欧米の文学との関連が大きな比重を持つようになるといった変化や、言文一致といった表現上の変革が見られた。近代の文学が、そのまま現代の文学に繋がっていると見られる親近感があることは事実であるが、近代前期の新しい文学の動きや、その主張の中には、否定的にせよ、近世以前の文学とのつながりの深いことも知っておかねばならないであろう。

日本文学史の時代区分表

1	上代	中古	中世				近世	近代前期		近代後期
2	古代前期	古代後期	中世				近世	近代前期		近代後期
3	古代		中世				近世	近代		
4	上古	中古	中世				近世	近代		
5	大和	平安	鎌倉	南北朝	室町	安土桃山	江戸	東京		
	奈良							明治	大正	昭和

上代の文学展開表

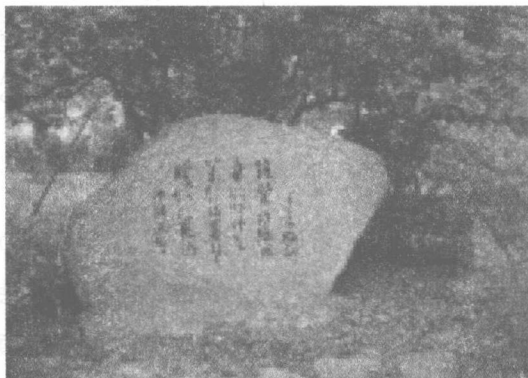


第一部 上代の文学

時代の区分 古代前期（奈良以前及び奈良時代）

国初から平安遷都（へいあんせんと）（七九四）までを上代とする。上古、あるいは大和・奈良時代ともいう。十二世紀末までを古代とし、そのうちの時代を古代前期ともいう。

第一節 序論



万葉歌碑

日本史で古代前期というのは、おおかた紀元前五世紀ごろから八世紀末の四百年間、すなわち文字の歴史があつてから七九四年の平安遷都までの間を指す。その中でも奈良時代を中心に行っている。日本では四世紀頃の漢字の伝来までは、無文字の時代で、文学といえば口誦以外になかった。それに奈良朝以前は、都もたびたび変わり、全国的に統一しておらず、文学的にも甚だおぼつかなかった。八世紀の初頭初めて全国を支配した天皇制が確立し、都を奈良

に定めた。当時の奈良は、天皇と貴族と役人または彼らの召使いである奴隷の都であつた。だから奈良文化は、奴隷の血と汗で築き上げた宮廷貴族の文化である。神話伝説にしても、上代の伝説を素材にしながら、彼ら支配者の手によって焼き直したもので、彼らに都合のよいように翻案したものであつて、人民の文化ではない。いわゆる天照大神（あまてらすおおみかみ）の作り話や神武天皇の東征などは、よくこのことを証明している。ただわずかに『万葉集』（まんようしゅう）に表れる美しい男女間の恋歌（れんか）や防人歌（さきもりのうた）に出てくる兵役にとられる苦しみを歌ったもの、東歌（あづまうた）に表れる百姓の内心の声などが当時の人民的文学の素朴な面影をいく分か残しているくらいである。

この時代は、わが中国の隋が滅びて唐朝に入った頃で、奈良時代は、わが国のいわゆる盛唐期に当たる時代である。日本では、三世紀頃からすでに中国大陆との交通が始まっている。七世紀聖徳太子（しょうとくたいし）の時小野妹子（おののいもこ）を隋に派遣したことがあつた。奈良朝に入ってから盛んに遣唐使や留学生を派遣して、大陸から中国文化を吸収し、一時遣唐使とその随員の総人数は五、六百名にも達した。留学生の留学期限も長く、おおむね十年、二十年とし、長いものは三十年にも及んだ例がある。しかも、その帰朝に際しては、唐から大量の典籍を携えて帰ったのはもちろん、またしばしば唐の学者、僧侶を伴ない帰ったのである。だから奈良文化の特徴といえば、貴族的文化であり、「唐風」であると言えよう。

この章の奈良文学は、主として『記紀』（きき）及び『万葉集』を中心に分析した。そのほか、この時代の文学としては、また播磨風土記（はりまふどき）、常陸風土記（ひたちふどき）、出雲風土記（いずもふどき）などの伝説を内容とした風土記（ふどき）文学や懷風藻（かいふうそう）、仏足跡歌碑（ぶつそくせきかひ）などの詩歌集があるが、都合上これを省略した。

第二節 神話・伝説文学

言語は社会的産物であり、労働の所産である。われわれの祖先である大昔の原始人は、生きるために自然と絶えず命がけの戦いをしなければならなかった。かれらは自然との戦いにおいては、決して一人ひとりばらばらになって戦うのではなく、集団的に行わねばならなかった。このように集団的に自然との闘争という実践過程を通して、おのずから頭脳が発達し、手が発達し、それとともに客観的必要から相互間の意志を交流する言語も発生し発達した。即ち、労働生産の発達に伴い相互間の意志交流の手段としての言語もおのずから発達し、言葉の量的方面も質的方面も逐次豊富に多彩になってきた。

言語は労働の産物であると同時に労働に力を与え、労働を押し進める原動力ともなる。大昔の人々が言語という手段を持つようになってから、ますます自然に対する認識力を高め、労働方法を会得し、そうして生産に対する願望や情熱を高めていく、これらの労働方法、生産に対する願望・情熱などを表す言葉が一定の形式となったとき即ち原始的文学となるのである。例えばわれわれが今でも共同労働をするとき、あるいは綱引でもするときによく「エッショエッショ」や「ワッショワッショ」の声を発するであろう。いうまでもなくこれは労働するときに、人々が自然に発した声である。このような自然に発出した呼声によって、人々は呼吸を調整し、歩調を合わせ、ひいては労力を節約し、疲労を忘れる。同様に昔の人が集団的労働をする場合にも、互いに呼びかけ、励まし、慰さめ、あるいは歩調を合わせるために、「エッショエッショ」の如き声を出したに違いない。よって原始的な言葉は労働と固く結びついており、それが発達するにつれてある一定の形——形式をとるようになり、あるいは簡単なリズムを伴う歌の形となる。これがすなわち原始的文学の詩歌の形である。

ちょうど言葉や原始的文学の詩歌が労働の所産であるように、大昔の人々は、皆踊りや宗教的儀式を愛していた。原始人の踊りは非常に素朴でありながら極めてはつらつとして新鮮味があり、現実的生活を表現し、かれらの生産労働と固く結びついている。かれらは舞踊という形式を通して、労働を謳歌し、疲労を回復し、互いに慰さめ、励まし合うと共に、また舞踊というものを生産の経験を交流し、技術的修得の手段として自然との戦いの武器とも見なすのである。

1.2.1 口承文学の時代

日本人が文字というものの存在を知ったのは、おそらく三世紀末であり、その文字は中国で作られた漢字であった。しかし、その文字を用いて筆録し書物が作られるのは、七世紀に入ってからのことと言われる。ただ、文字によって記載される以前にも、文学が存在しなかったのではない。今日では、『古事記』などの中に残された痕跡（こんせき）を逆にさかのぼってうかがうことしかできないが、「うた」や「かたり」といった形での口承文学（こうしょうぶんがく）、歌謡（かよう）や神話（しんわ）・伝説（でんせつ）が形成されていたことが知られている。

1.2.2 白鳳の文化

『万葉集』の巻一は、伝承（でんしょう）の歌と見られる雄略天皇（ゆうりゃくてんのう）の歌を巻頭におき、舒明天皇（じょめいてんのう）の国土賛美の国見（くにみ）の歌から、時代を追って書きとめられている。『古事記』も舒明天皇以後を「現代」と考える時代観にもとづいて、その前の推古天皇（すいこてんのう）で終わっている。この両朝のころから中国文化の導入と仏教の興隆が顕著（けんちょ）になり、中国にならって律令国家（律令にもとづく中央集権的国家体制。中国の隋・唐の制度に範を求めた）への道が整備されていくのである。やがて白鳳文化（はくほうぶんか）と呼ばれる時代が出現し、歴史の編纂（へんさん）が企画される。『万葉集』の巻一から推定されることであるが、『万葉集』の母胎（ぼたい）となった歌集が最初に集められるのも、白鳳文化のにない手たちによってと考えられている。『懷風藻』（かいふうそう）に収められた大津皇子（おおつのみこ）らの漢詩や、『万葉集』の柿本人麻呂（かきのもとのひとまる）の和歌などから、この時期には創作の分野においてもいちじるしい進展のあったことが知られよう。

1.2.3 青によし奈良



奈良に平城京（へいじょうきょう）が作られ、やがて「青によし奈良の都は咲く花のにほうがごとく今盛りなり」と歌われる絢爛（けんらん）たる天平文化（てんぴょうぶんか）が開花する。『古事記』『日本書紀』の編纂が成り、『風土記』（ふどき）も作られる。漢詩集としての『懷風藻』も編まれる。『万葉集』も数次の編修段階を経て、奈良時代の末には集大成される。漢字をもって記載される以上、当然のことではあったが、用語や文体の上で漢籍（かんせき）（中国人編著の書物）の影響を受けており、内容の上でも、中国の文学や思想への傾倒が見られる。しかし、口承文学の長い時代を通じてはぐくまれてきた日本民族固有の伝統の上に文学形成を遂げた和歌は、外来の漢詩文と交流しつつ、叙情詩を完成させて『万葉集』にみるようなすぐれた作品を生み出しているのである。



平城京跡図

1.2.4 神話・伝説と祝詞

1.2.4.1 神話と伝説祝詞



倭建令（日本武尊）や『日本書紀』に採用される過程で変質してはいるが、口承で伝えられていた神話・伝説の面影が記載された文字を通して浮かび上がってくる。

『古事記』の成立

『古事記』一天皇中心の律令国家確立に伴う歴史書。神話・伝説・歌謡を含む。

【成立】和銅五年（七一二）。

【編者】稗田阿礼（ひえだのあれ）が誦習（しょうしゅう）していたものを元明天皇（げんめいてんのう）の勅で太安万侶（おおのやすまろ）が撰録。

【巻数・内容】三巻。上巻は神々の事跡、中下巻は各天皇の系譜と事跡。

大和朝廷が統一され、天皇中心の律令国家が確立していく中で、天武天皇（てんむてんのう）は、各氏族に伝来されている帝紀（ていき）（天皇の系譜）や本辞（ほんじ）（神話・伝承の類）に誤りが多いとして、統一整理し、稗田阿礼に誦み習わせた。元明天皇がその遺志を継いで、太安万侶に撰録（せんろく）させ、和銅五年（七一二）に奏上（そうじょう）されたのが『古事記』三巻である。上巻は神々の事跡、中・下巻は各天皇の系譜と事跡として書かれている。文章は、読者が訓注（訓で読むという注記）や音注（音で読むという注記）を頼りに読んでいくと日本語として読めるといった、安万侶の苦心に成るものであった。

訳文:

天と地がはじまった時に、高天の原にお生まれになった神の名は、天の御中主の神。次に高御産巢日の神。次に神産巢日の神。この三柱の神は、いずれも単独の神であられて、姿をお隠しになっていた。

『日本書紀』と『古事記』

『日本書紀』国際的文体の漢文体で書かれた日本の最初の正史。国外に朝廷の威信を示す。

【成 立】養老四年（七二〇）。

【編 者】舎人親王（とねりしんおう）らが編修

【巻 数】三十巻

『風土記』地誌。地方の神話や伝説が見られる。

【成 立】和銅六年（七一三）に撰進の勅命。

【勅命者】元明天皇

【種 類】完本として『出雲風土記』、部分的に残るものに『常陸』『播磨（はりま）』『豊後（ぶんご）』『肥前（ひぜん）』がある。

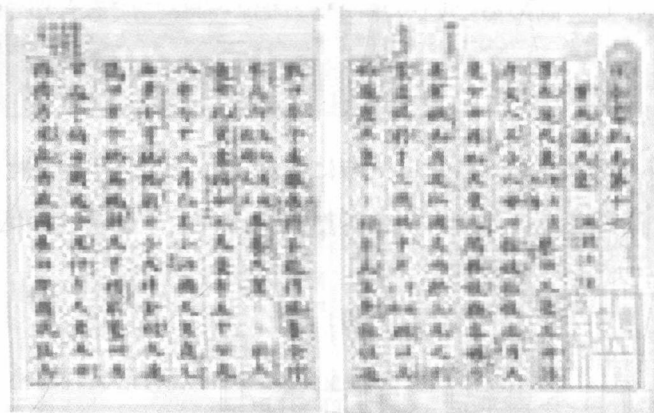


『古事記』

元正（げんしょう）天皇の養老（ようろう）四年（七二〇）、『日本書紀』三十巻が舎人親王らにより編修される。最初の正史として、当時の国際的文体である漢文体で書かれている。『古事記』と同じく、伝説・歌謡を含んでいるだけでなく、その漢文体が、漢籍に典拠のある語句を用い、よくみがきあげられた文章で、文学的にも価値が高宮廷を中心に重んぜられ、後代の思想・文学に与えた影響も大きい。また、和銅六年（七一三）には元明（げんめい）天皇が諸国に命じて、地誌（ちし）としての風土記を撰進させた。『出雲土風記』

（いずもふ

どき）『常陸風土記』（ひたちふどき）など五つの風土記が現存された形での断片（だんぺん）がいくつか残る。地誌ではあるが地方の神話や伝説が見られ、『常陸風土記』のように、漢籍の知識を縦横に利用した文章で書かれているものもある。



『日本書紀』（ト部兼方本）

1.2.4.2 祝詞

神話や伝説を育ててきた古代の人々は、神々をあがめ、祭りの儀式を重んじた。その厳粛な祭りの場で、神々に奏上する文章が祝詞（のりと）である。現存の祝詞¹は、『延喜式²（えんぎしき）』など平安時代の文献に収められて伝わっているが、その起源は古いと考えられる。言葉に神霊（しんれい）がやどるとする言霊（ことだま）の信仰（しんこう）が生きていた時代に作られ、継承（けいしょう）されたものである。散文に近いものとはいえ、反復（はんぷく）・重句（かさねく）・対句（ついく）などを用いた韻律（いんりつ）の美しい（うるわしい）、荘重（そうちょう）な表現が見られる。なお、より散文的な宣命（せんみょう）にも、祝詞や『万葉集』の雑歌（ぞうか）・挽歌（ばんか）に近い表現が取り入れられている。

¹祝詞：言霊（ことだま）信仰の時代、厳粛な祭りの場で神々に奏上する文章。

²延喜式：醍醐（だいご）天皇の命により藤原時平・忠平らが撰進した律令の施行細則。延長五年（九二七）成立。五〇巻。

『古事記』と『日本書紀』の比較

成 立		編 者	巻 数	内 容	文 章
古 事 記	和銅五年 (七一二)	稗田阿礼が 伝え、太安万 侶が撰録	三巻	(上巻) 神話 (中・下巻) 神武 天皇—推古天皇	訓注と音注を頼りに読 む、安万侶苦心の変則 漢文体
日 本 書 紀	養 老 四 年 (七二〇)	舍人親王ら	三十巻	(巻一・二) 神話 (巻三一三〇) 神 武天皇—持統天皇	最初の正史として当 時の国際的文体であ る純漢文体

1.2.5 歌謡から詩歌へ——記紀の歌謡

古事記や日本書紀の中には、神話や伝説に結びついた形で、多くの歌謡が採られている。記紀歌謡¹と呼ばれ、その多くは口承時代の歌謡の面影をとどめている。記紀の物語と結び付けられる以前は、独立した歌謡であったものもあり、それらは男女が集まってかけあいの歌をたたかわせた歌垣²(うたがき)や、宴席の歌、労働・戦闘の場での歌であったと考えられている。歌体もさまざまで、五音・七音を基調とし、片歌(かたうた)・旋頭歌(せどうか)・短歌や、のちの長歌に展開するものなど、定型歌に至る過程をうかがわせる。

歌謡の歌体

片 歌	五七七。二手に分かれて唱和する歌謡の一方。
旋頭歌	五七七五七七。片歌の二首を重ねた形式。
短 歌	五七五七七。長歌の末の反歌が独立したものらしい。
長 歌	五七五七……五七七。普通最後に反歌としての短歌形式を伴う。
仏足石歌	五七五七七七。奈良薬師寺の仏足(ぶつそく)石歌(せきか)碑に刻む二一首の歌謡から

¹記紀歌謡：『古事記』『日本書紀』の中の歌謡。多く口承時代の歌謡の面影を残す。

²歌 垣：春や秋に、特定の山上や海辺の広場で男女が集まって歌をかけあいで歌い戦わせながら、豊作・豊漁などの祝いを込めた古代の行事。同時に、結婚相手を見つける。「かがい」ともいう。